かみねっちょ新聞

令和４年　２月号

ニホンザルの冬と言えば･･･

赤い顔とお尻。当園のニホンザルたちは 10 月頃から 2 月頃までが繁殖期。

いわゆる「恋の季節」ですね。顔とお尻が赤いのは皮膚の下の毛細血管が透けているからですが、この時期はホルモンの関係で顔やお尻がいつもよりも鮮やかに赤くなります。群れの中で力の強い個体がより赤くなる傾向にあるようです。

【春ごろの写真】
ちなみにこの顔は怒っています。
ニホンザルに関わる職員からは
キンシコウ（キンシコウという種類のサルに顔が似ているから。主観ですよ）とよばれ比較的見分けがつきやすい個体です。

どちらも

同じ個体です

【1 月の写真】
春に比べると顔の赤さが
かなり鮮やかになっています。
また、夏毛から冬毛に生え変わっており
もこもこしていることも分かりますね。

そして、恋の季節は、闘いの季節でもあります。メスをめぐる群れの中の順位争いが頻発し、いつも以上に激しい闘争も繰り広げられます。

毎年、恋の季節はやってきますが、現在のニホンザル舎には多くのサルたちが暮らしており定員マックスむしろオーバー状態。現在は一時的に繁殖制限をおこなっています。子ザルも恋しいですが、今のニホンザルたちも個性豊かで彼らの関係性をみるのも面白いですよ。ぜひ、彼らのサル模様も観察してみてください！

ニホンザル担当　西川

園長のひとりごと

年も明けた新年早々、仕事で神戸へ行ってきた。爬虫類関係のちょっとした実技指導を兼ねた会議なのだが、開催を決めた昨年末はコロナも落ち着き、開催できると主催者は判断したのだろう。オンラインを一切使わず、全面的な対面会議は何年ぶりか。それでもオミクロンが首をもたげ始め、日程の１月５～６日以降は一気に感染が広がり、まあ何というか滑り込みセーフって感じの危うい出張だった(笑)。そんな時期でも往復の飛行機はいずれも満席！オミクロンさえ出てなければ、新年の社会・経済はきっと明るい局面に入っていたかもしれない。

２日間の会議の後、神戸に新しくオープンした水族館へ立ち寄ってきた。爬虫類関係の知人がこちらへ転職し、案内してくれたのだ。神戸港に面したビルの２階がエントランスになっており、暗い館内に一歩足を踏み入れるとそこは光と音の異空間。ご老体の私には目を慣らすのに時間が必要だ。チカチカする中を進むと怪しく光る水槽にやっとお魚たちが。またこの水族館には海の生き物以外にもげっ歯類やリクガメ、ヘビなどの爬虫類も展示されている。ムムッ、異業種浸食？まあこの先、動物園・水族館という棲み分けはなくなるかもしれない。特色のある各フロアを進むと圧巻は古き日本の庭園をイメージした水の広場。壁にはひっきりなしに映像が映し出され、まさに光の芸術。ここのテーマは「アクアリウムとアートが融合した新感覚の都市型水族館」なのだそうが、そっちに気を取られ気がつけば肝心の展示生物の記憶があまりない。国内には新しい水族館がぞくぞく登場しているが、おしゃれできれいなデートスポット型へますます変容を遂げているように感じた。潤沢な資金の活用はうらやましい限りだが、動物好きのこの知人も「個人的には疑問を呈しながらやっている」と。

さて水族館はどこへ向かうのか。

３月の予定

- ６日（日）　園長ガイド
- 12日（土）、19日（土）　ゆったりガッチリ飼育体験！
- 13日（日）　ライオン　きぼうの誕生日会

詳細はかみね動物園ホームページをご覧ください
または　０２９４(２２)５５８６　まで

YouTube

Twitter

SNSでも写真や動画、最新の情報をお知らせ中！

Facebook

「鳥インフルエンザ」対策しています。

鳥インフルエンザはＡ型インフルエンザウイルスが引き起こす鳥の病気です。
自然界では、カモなどの水鳥を中心とした鳥類がウイルスを腸内に持っていますが、症状が出なかったり、軽症の場合は自然に治ってしまったりするため大きな問題にはなりません。しかし、そのウイルスが変異し、強毒性をもつと死亡率が高くなる「高病原性鳥インフルエンザ」となります。

獣舎周りに消石灰

防鳥ネット設置

動物園は屋外施設なので、ウイルスを持つ野鳥との接触がないとは言い切れません。
飼育している鳥類たちにうつってしまったら大変！
ということで、国内の発生状況により、鳥類の一部非展示、防鳥ネットの設置、消石灰の散布などの対策を実施しています。現在茨城県内での発生はありませんがおとなりの千葉県で発生したため、警戒レベルを上げ、予防に努めています。